

生物多様性影響評価書に対する修正意見

大項目	中項目	小項目	ページ	行	修正意見	
1.生物多様性影響の評価に当たり収集した情報		1.宿主又は宿主の属する分類学上の種に関する情報	3	5行目	大部分の種子では発芽能を失うと記載されているが、どのくらいの期間で失うかを記載すること。	
			3	へ	イネのアレロパシーについては、アメリカ農務省のグループがPI312777を選抜している。日本の農環研では赤米とくに阿波赤米・紅血糯などにレタスを検定植物としたときに阻害活性が強いことを報告している。IRRI(国際イネ研究所)でも研究され紅血糯の圃場における雑草抑制効果を確認している。ここでは松尾らの報告から孫引きしておられるようであるが、原典から引用されることが望ましい。	
			4	2行目	イネの他感物質に関しては、近年いくつかの報告がある。アメリカ農務省のグループはフェノール性の物質を、韓国のキムらはフタル酸類を、中国のコングラはヒドロキサム酸類を、香川大の加藤らはモミラクソンを、報告している。イネのアレロパシー研究は、この他にも、スペイン、エジプトのグループも行っており、研究データが蓄積されている。	
			4	7～9行目	「現在までに、これら物質が自然条件下で周囲の野生動物等の生育又は生育に支障を及ぼし、生態系を攪乱しているという報告は知られていない」とされているが、多くの報告がある。たとえば、Science (2000)とこれに続く一連の報告でモンタナ州立大のCalawayらは、自然条件下で外来植物として北米に侵入したCentaureaが、土壤中に放出する他感物質により在来植物に影響を与えると報告している。この他に、議論はあるが、サルビア現象、メスキート、クレオソートブッシュ、ランタナ、イタドリ、等が周辺の植生や昆虫相に影響するとされている。	
	2.遺伝子組換え生物等の調整等に関する情報		2.遺伝子組換え生物等の調整等に関する情報	6	②aとb項	アレルギー性の記載があるが、有無が知られていないのならば、既知アレルゲンタンパクや既知毒性タンパクとの相同性検索(連続する8アミノ酸残基をづらしながら相同性検索)すべきではないか。
				10	(4)	アグロバクテリウムを用いた組換え手法であるから染色体上であるという記述は本項目の主旨と異なる。通常は交配後代の分離から推定する
				11	ハ	ハイグロマイシン耐性遺伝子をプローブとするサザン解析を実施していない以上、PHR遺伝子と同一のT-DNA上にあるのか、あるいはHyg遺伝子(あるいはその断片)のみが2コピー(片側は不完全なT-DNAとなっている)ある可能性もこの記載やデータだけでは否定できないので、1コピーと断定するには無理がある。また、この点に関し、12ページの(5)項で、1コピーであることを前提に記載されているので、その点も対応が必要である。ハイグロマイシン耐性遺伝子をプローブとするサザン解析データが欲しい。
				12	ホの2行目	「移入した核酸は染色体上に存在して」という記述について、アグロバクテリウムを用いているため染色体上にあるとしているが、通常、染色体上にあることは交配後代の分離から推定することから変更が必要
				12	(5)	HPT遺伝子とOsPHRとの連鎖の導入ゲノム上での安定性が考慮されていないと思われる。
	2.項目ごとの生物多様性影響評価	1.競争における優位性	1.影響を受ける可能性のある野生動物等の特定	19	(1)1～3行目	イネS-Cに優位性がないことが十分説明されていない様に思われる。野生植物と比べ、論理的に記述した方が理解が得られると考えられる。
				20	(3)	より簡便な、サンドイッチ法、プラントボックス法は試されなかったでしょうか？
						いずれの場合も、組換えイネの方がアレロパシーが弱くなる傾向にあるように思われますので、たとえ統計的に有意差があっても、生態系に及ぼす影響は小さいと考えられます。
	2.有害物質の産生性	3.影響の生じやすさの評価				